高等教育の中で外国語教育をどのように位置づけるべきか

——外国語教育の若干の問題点——

長谷川隆久

高等教育の中で外国語教育，とくに一般教育科目に準じられている外国語をどのように位置づけるかという問題は，解答を得るのがなかなか難しい．

一般教育科目そのものの位置づけは，戦後の教育改革の路線を継承，発展させていく限り，それほど難しいことではない．この路線を継承することについては，賛否両論ありうるだろうが，少なくとも，筆者にとっては，筋道の通った議論があると思える．たとえば，山口正之氏は，「講座日本の大学改革 [2] 大学教育の改革 1」(青木書店 1982 年) の序論で次のように述べている．

> 「戦後の教育改革は，財閥解体や土地改革などの日本の非武装化と民主化を目ざして遂行された広範でラディカルな一連の変革措置の体系のなかの重要な環であった．．．(中略)
>
> そして，新制大学の発足と一般教育課程の設置は，この教育改革の重要な一翼をになうべきものとして構想されたのである．その意味で，一般教育の原点は，ほかでもなく，戦後日本の民主改革にあるということ，民主主義的価値観と人文的教養と，そして理性的な思考力をもった新しい型の日本人の形成に新制大学と一般教育は貢献しなければならないと考えられていたということを確認しておくことが，現代の大学における一般教育の地位と役割をみるばあいにも，依然として重要だといってよいであろう」(p. 3)

山口氏は，また次のようにも言っている．

「．．．自由で民主的な社会は，人文的教養と理性的な思考力をもつ知性的な市民を必要とする．民主主義の成熟度は，結局のところ，国民と有権者の文化的水準の関数である．無知の上に民主主義をきずくことはできないし，基本的人権の尊重という民主主義的価値観は，自らの頭で批判的に思考しうる知性に支えられる程度に応じて確固たるものでありうる」(p. 7)

確固たる民主主義を築くために，「自らの頭で批判的に思考しうる知性」を育成するのが新制大学における一般教育に課せられた役割だとする山口氏のこの論点は，一般教育および一般教育科目に準じられている外国語教育の意義を考えていく上で，忘れてはならない視点である．(この点は私立大学連盟編「私立大学—きのうきょうあした」も強調するところである[福武書店．pp. 60～61])

一方には，一般教育の無用をとなえる議論もある．この論をとれば，専門教育を拡充し，一般教育を縮小廃止するか，専門教育のための予備課程として，これに隷属させることになる．広い視野と識見をもち「自らの頭で批判的に思考しうる知性」を育成するという目的からはほど遠く，専門領域で優れた能力を発揮する少数のエリート・マンパワーを養成することになろう．戦前の大学が富国強兵のためのエリート・マンパワーの養成機関であったとすれば，専門教育偏重の戦後の大学は，経済成長のためのエリート・マンパワーの養成機関と化する危険がある．この危険だけは，どうしても避けたい．一般教育は無用の長物ではなく，専門教育とは別に，独自の教育的価値をもつ教育システムであり，個人の一般的な人格形成に深く関わる教育制度だと思うのである．この制度が，民主主義の維持と発展の重要な要素であることを再確認することが，一般教育および一般教育に準じられる外国語教育のあり方を問う時の基本的視点であろう．

ところで，問題は，専門科目の外国語は別として，一般教育に準じられる外国語教育が，上に述べたような個人の人格形成に，果して寄与しうる

のだろうか，またどういう風に寄与できるのかという点である．これとは逆った考え方も存在するのである．

たとえば，外国語教育は専門教育に従属すべきだという考えがある．その意味は，外国語教育は，特定専門分野の海外文献を読みこなすための予備教育ということであり，また学生が社会に出た場合に，職業遂行上，役に立つ外国語教育をせよ，ということである．つまり，職業上必要な情報を外国語によって直接収集できる能力，または，外国語によって，直接，国際的な人的関係を持つことのできる能力を与えなければならない，ということであろう．

このような立場（これは，教養か実用かという分け方をする場合には，実用論の立場だと言っていいだろう）に立つと，大学で現在実施されている語学教育は役に立たないということになろうし，また，学生のすべてが役に立つ外国語を身につける必要はない，という結論に到達しがちである．すべての学生が卒業後，実生活の上で外国語を必要とするようになるわけではないからである．このような考え方をおしすすめると，語学教育のあり方を次のように変えていくことになりかねない．

学生にやる気がない，結果として教師もやる気がない，悪平等はやめよ，実用価値のない外国語教育に無駄な時間をさくな，ということになって，一部の「優秀な教師」によって一部の「優秀な学生」に英語だけを教えれば良いということになろう．あるいは同工異曲だが，一部優秀で余力のある学生には第2外国語を，そうでないものには，英語だけをみっちり仕込めば良いということになる．加藤周一氏の次のような考え方も，この流れの中にあると言っていいだろう．加藤氏の議論は，中等教育に関するものだが，実用論の立場を見事に表現している．

「要するに英語の実用という面からいえば，私には次の三つのことがあきらかだと思われる．

第一，日本の中学生の圧倒的多数は，仕事の上で将来英語を実用に供する機会をもたない．第二，実用に供する必要のある場合には，今

の中学校はもとより高等学校卒業生の知識でも不充分至極である．．．(中略) 第三，従って全国の中学生に漫然と不充分な教育をほどこす代わりに，一部の生徒をもう少し徹底的に教育できるような方法を，何とかして編みだしてゆく必要があるだろうということである」

「合理的な思考を訓練するためには，ジャックとベッティが朝何時におきるなどと呟いているよりも，幾何をやった方が有効なのではないか．国際的な視野を獲得するためには，日本語で地理を勉強した方が早くはないか．．．(中略)．．．私はいくさの間，日本語に神変不可思議な力があるという学説にも感心しなかったが，いくさの後で英語に神変不可思議な力があるといわれても俄に信じることはできない．」(「再び英語教育の問題について」『世界』昭和31年2月)

このような実用論の立場の根底には，言語もしくは外国語は，情報伝達のための単なる媒体だとする言語観が横たわっているようだ．したがって，この媒体を操作して直接，情報を獲得する必要のある者だけが，この操作技術を身に付ければ良いのである．他の者は，日本語で情報そのものを獲得すればよい，また知性の発達と外国語習得は無関係だから，一般には，「幾何」をやってればいいということになるわけである．もし，高等教育が，この考え方に与すれば，大学の中に情報伝達の媒体の操作の特殊技術を身につける一部エリート学生集団と一般の学生という区別が行われるようになり，大学が社会的選別にさらに手を貸すことになろう．

上のような実用論の立場に対して，外国語教育は，学生の人格の形成に寄与できるとする議論がある．これが，言わゆる「教養論」の立場であるが，これにもいくつかの視点がある．

1つは，実用論のまったく対極にあって，外国語は，必ずしも役に立たなくとも良いとするものである．異なる仕組みの言語に触れることで，日本語の仕組みと言葉の仕組みをより深く理解できれば，学習した外国語が「実用」的価値を持たずとも，外国語教育の目的は，十分，達せられたと考えるのである．これは，外国語教育を「幾何」の教育のように見なすものであろう．これによって，知性は，きわめて抽象的レベルで開発される

ことになって，この議論を容れると，教師も学生も，怠惰になってしまう危険がなくもない．

もう1つは，異文化に触れることが，人格形成に役立つのだとする視点である．この場合にも，異文化との接触にあたって，言葉をどう位置づけるかによって，考え方が変ってくる．1つの極としては，言葉は，文化伝達のよく言って媒体，悪く言えば道具であるとする考え方があるだろう．これは，言語観に関しては，「実用論」と同じである．したがって，この立場に立っても，外国語教育無用論が出てくる可能性がある．言葉は，単なる媒体なのだから，外国語の苦手な者は，無理をして外国語を学ぶ必要はない．翻訳を読めば十分である．外国語を学ぶのは，意欲のある一部エリートに委せておけという主張である．

私は，言語は，単なる媒体・道具とは考えていない．しかし，かりに媒体だと認めるとしても，何を翻訳するか，またどのように翻訳するかという自由は，翻訳を読む側には無いことを指摘しておきたい．

異文化を重視する考え方のもう1つの極も考えられる．それは，言葉＝媒体の対極にある考え方で，言葉は文化そのものだとするものである．丸山圭三郎氏の「共同幻想」という言葉で表現される思想は，まさにその典型と言える．

丸山氏が，異文化との交流を，通常の「教養論」が重視するような仕方でとらえているとは思えないが，次のような発言にみられるように，異文化との接触を軽視していないことはたしかであろう．丸山氏は「読み」の実践の一つについて次のように言っている．

> 「異なった〈関与体系 système de pertinence〉としての空間・時間的異文化との接触を通して両者を相対化させる作業がそれである．空間的には地球上のさまざまな個別文化のノモスを，また時間的には中世・古代のコスモロジー，神話，シャーマニズム，錬金術などに代表される，現代人にとっては全く異質な思考を知ることにより，強いカ

ルチャーショックを受ける体験を通して，自らの硬直したゲシュタルトを転換させることにほかならない．そもそも，言葉がア・プリオリな思考対象をもたないということに気づいたのも，異なる言語を習得することによって外国語と自国語をともに相対化した時からであったことを想起されたい」(丸山圭三郎「文化のフェティシズム」勁草書房 p. 248)

ただし，丸山氏の言語観は，「硬直したゲシュタルト」，「言葉がアプリオリな思考対象をもたない」という発言からも推測できるように，極めてペシミスティックである．

「...ソシュールの手稿9に見出した次の文はまことに衝撃的であった．

事物そのものに先立って事物と事物のあいだの関係が存在し，その関係がこれら事物を決定する役割を果す．(...)いかなる事物も，いかなる対象も，一瞬たりとも即自的(アン・ソワ)には与えられていない．(断章番号三二九五)

これを読んだ私には，従来の観念論，実在論がともに疑ってみようともしなかった〈ロゴスの現前〉が，ソシュールによって根底から覆えされたと思えた．文化現象の一切は表象によって二次的に生み出された共同幻想の世界で，その表象すらもともとは存在しなかった関係の網の目に過ぎない，という考え方は，ヘレニズム，ヘブライズムの正嫡である西欧近代思想をその根源から揺さぶる．絶対的神も理性も世界の理法もア・プリオリではない．この視点に立ってはじめて，従来は非合理ということで学問の対象とは認められなかった無意識とか夢とか狂気，観念の名のもとに隠されていた身体性，あるいは，身体性の底にある欲望の世界が照射されるのではあるまいか」(同上書 pp. 10～11)

「恣意的価値はその基準を一切ヒトの本能図式のなかにおいていないために合目的的な方向性も有さなければ，人間の種のゲシュタルトに見出されるような生理的ア・プリオリも存在しない．ヒトが生み落とされ

るのは，過去の化石としての制度の中なのであって，一切は人為による共同幻想の世界であり，それが非自然である限り絶対的価値などあり得ない．「かくあるべし」という基準がないということは，変革の確たる方向が見出せないということでもあり，人びとはひたすら文化の抑制に順応し，自らを共同幻想の中に組みこむことによってこれを強化し硬直化させ，ますます非自由の世界に沈澱していく．つまりラングという構造は非自然的な価値体系であるが故に，一旦惰性化すると殆んど変革不可能のような停滞を起こす．これが時間のファクターのもとで〈恣意性〉がもたらす第一の結果である．

ところが，そのまさに反対に，ラングの中に一切の絶対的基準がないということは，時間の流れとともに実体面で起きるさまざまな偶発事が体系の中に組みこまれて，関係そのものを再布置化することを妨げるいかなる力をももたない，ということである．．．これが時間のファクターのもとで〈恣意性〉がもたらす第二の結果なのである」(同上書 pp. 208～209)

「一切は人為による共同幻想の世界であり．．．人びとはひたすら文化の抑圧に順応し，自らを共同幻想の中に組込むことによってこれを強化し硬直化させ，ますます非自由の世界に沈澱していく」とは，まことにペシミスティックな発想である．言語のもつこの「恣意性」を逆手にとって，パロールの営為によって，「共同幻想」を再布置化することも可能かもしれないが，しかし，「合目的的な方向性も有さなければ，人間の種のゲシュタルトに見出されるような生理的なア・プリオリも存在しない」のだから丸山氏自身の言われるように「シーシュポスの状況」(丸山圭三郎「ソシュールを読む」岩波セミナーブックス 2, p. 292) というきわめて悲劇的，絶望的状況に陥らざるを得ないのである．

言語の外に，言語がその指示対象とするような実在（客観的観念論でいうところの実在も，唯物論的な意味での実在も）は，存在しないとするの

が丸山氏の考えの根底にあって，上のような悲劇的な結末を導きだすのであるが，この考えには，私は首肯しがたい．丸山氏からの批判は避けられないと思うが，言語は意識への実在の反映だと考えるし，その場合，実在とは唯物論的な意味で，私は言っている．言語は，情報伝達の単なる媒体ではないが，(言語は文化創造と深く関わっている，また文化の一部であるが，) かといって，言語が文化であり，文化が言語そのものであるわけではないし，また，人間が，「言分け」によって恣意的につくりだした「共同幻想」だとも思わないのである．問題は，言語が，文化の創造とどう関わるのかということであろう．

丸山氏の言うように，言語（言分け）によって，人間が世界像・「共同幻想」・文化を砂上楼閣のように構築しているとは思えない．しかし，言語は，情報の単なる媒体ではなくて，人間の認識能力と深く関係している．言語の習得が，認識能力を飛躍的に発達させることは，否定できない．児童が言葉を獲得するということは，ピアジェの言うように，空間的にも時間的にも，言葉を獲得する以前の認識の限界をはるかに越えることである．感覚の制約から開放された人間には，それ以前とは，質的に全く異なる世界認識が与えられる．

また，坂野登氏が，ソビエトの心理学者ルビンシュテインの主張を解説して言われるように，単に，空間的，時間的制約から解放されるだけではなくて，言葉の獲得は，より深い客観世界の認識をあたえるはずである．

> 「...また言語的シンボルを操作できるようになることが思考をより抽象的で一般化されたものにし，また対象の認識をより正確に客観的に行わせることを可能とさせることが予想される」(坂野登「意識とはなにか—フロイト＝ユング批判」青木書店，p. 20)

さらに，言葉による認識は，未だ存在しないものを心に描く能力を人間に与え，未だ存在しないものを存在させる力を人間に与えたと言って良い．自然を意識に受容的に反映するだけでなく，自然を計画的に変容する

ことが可能になったのである．そういう意味では，言葉と文化創造とは深く関わっている．しかし，創造された文化は，丸山氏の言われるような「共同幻想」ではなく，変容された自然であり，実在である．

言葉と認識，言葉と創造は深く関わっているが，言葉と人格形成の関係も無視できない．個人の人格形成の過程をきわめて乱暴な言い方をすれば，自然と社会的諸関係を認識する過程であると言っていいであろう．この認識は，もちろん，客観的に実在する自然と社会的諸関係の意識への反映の結果である．したがって，個人の意識への反映であって，客観的自然・社会的諸関係そのものではないから，その意味では，主観的である．ただし，主観が，恣意的に言語によって作り出した関係の網の目でもないし，人間集団が作り上げた「共同幻想」を唯々諾々として意識が受け入れたものでもない．客観的実在そのものではないにせよ，客観的実在の意識への主観的反映の結果が認識である．そして，単純な言い方かもしれないが，この主観的反映の結果の総体が，個人の世界観を構成し，個人の人格の基礎を作るものだと考えるのである．

自然・社会的諸関係＝客観的実在の認識は，抽象的な次元で行われることもありえよう．たとえば，書物を読むことによって，あるいは，今日の様々に発達した情報メディアによって．そして，認識するという行為をこのように抽象的な次元で捉えると，認識行為は，受動的な行為だと理解される危険がある．もしそう解釈すると，「自らを共同幻想の中に組み」こまれることは，少なくとも，ないかもしれないが，「過去の化石としての」他人の主観的反映の総体の中に組み込まれて「ますます非自由の世界に沈澱していく」ことになるかもしれないのである．しかし，実在を受動的に意識に反映するのが，認識行為の基本ではない．人は，むしろ，客観的自然・社会的諸関係に能動的に働きかけ，自然を変容し，新たな社会的諸関係を創出する積極的行動のなかで，実在を意識に反映するのである．（藤野渉「マルクス主義倫理学断想」『唯物論』第5号参照）

子供が，ナイフで鉛筆を削る時（こういう習慣は失われつつあるという

ことだが)，子供は，鉛筆という自然に能動的に働きかけこれを変容しているわけだが，その積極的な働きかけの中でナイフの様々な特性とその本質について認識するのであり「ナイフ」という言葉も覚えるのである．また同時に，ナイフで鉛筆を削るという行為の持ついろいろな意味を認識するのである．ただ黙って眺めているだけでナイフについての認識を深めるわけでも，大人の説明をきくだけでナイフについて知るわけでもないのである．

また，たとえば，幼稚園に入園した子供は，家庭にとどまっていた時とは異なる社会的関係の中に身をおきながら，その社会的関係に能動的に働きかけることで園内にそれまで存在した客観的な社会的関係そのものも変え，新たな社会的関係を創出していく．その能動的な働きかけの中で子供は，幼稚園の中の社会的関係を認識するのである．個人が成長して大人になれば，その関わる社会的諸関係も多様化する．職場，夫婦，子供などの関係やそれにつながる関係，余暇の活動を通じて結ばれる関係など様々な社会的関係が考えられるが，それらに能動的に働きかけ新たな関係を創出する．こういう能動的な行為の中で客観的実在の認識が行われるのであり，その中で，実在の意識への主観的反映の総体としての世界観と人格の基礎が形成されていくのだと思うのである．

認識行為が，カメラが，外界を写しとるように，受動的に客観的実在を主観的意識に反映させるのではないということは，大事な点である．書物などの情報メディアを通じての実在の認識の場合は，一見，受動的であるかのように見えるが，実は，そうではない．それまでの個人の生き方(客観的実在への能動的な働きかけ方)とこれから生きようとしている生き方と深く関連して，メディアを通じての情報が受け取られるのである．同じ情報が，人によって異なった受け取られ方をする(ある場合には，正反対の受け取られ方もある)ことがあるのは，抽象的次元での認識行為も決して受動的に行われているのではないということを示している．

さて，以上に述べたことと，外国語教育の重要性とはどのようにつなが

るのだろうか.

言葉が，人間が作り出した文化そのものではないことは確かであるが，しかし，実在を概念という形で意識に反映し，実在を深く捉えることができるのは，人間が言葉をもっているからである．また言葉によって自然と社会を意識に反映できるからこそ，自然を変容し，新しい社会関係を創出できるのである．そうしてみると人間にとって，自分の生きてきた軌跡であり，かつこれから生きていくための手段である母語は，大切である．また母語は，自分の軌跡であるだけでなく親兄弟，自分を取り巻く人達の軌跡であり，もっと広くは日本人の軌跡・歴史である，もしくは，歴史を概念化するものである．そしてこうした様々な軌跡・歴史は，自分の軌跡に深く影響しているし，今後の生き方にも影響していく．母語を獲得した私は，単に高度な認識の手段を手にしただけでなく，同じ手段を手にしまたそれを作りあげてきた過去の日本人，現在の日本人の人生によって支えられて，私個人ではおよびもつかないような優れた実在に働きかける手段と実在を認識する手段を与えられているのである．そういう意味で，母語は，私にとって極めて積極的な意味をもっている．

しかし，このことは私が，日本人としての限界の中にいるということをも示している．それは「共同幻想」というような，否定的な限界ではないが，(恣意的に作り出された実在に根拠を持たない網の目などではないから) しかし，現在生きている日本人が越えなければならない限界をもっている．この限界をどのようにして越えていくか.

もちろん，形式的に考えれば，日本人の歴史と日本の現在の社会を土台として母語の枠の中で，限界を克服していく手段を見つけることも可能だろう．しかし，現実はそうではない．明治以後の日本の社会の変化を見るだけでも，日本という枠組みの中だけで，日本人の問題を考えるわけにはいかないことは自明である．また日本と日本語という枠組みを越えることで日本人は，様々な限界を克服してきたのである．外国語だけが，唯一，限界克服の手段ではないが，外国語は，とりわけ，現代人に与えられた有

効な手段の一つである．特別のエリートが独占すべきものではない．

外国語が，限界克服のために有効なのは，それが単なる情報伝達の媒体ではないからである．母語と同じように，当の外国語を母語とする人々が，生きてきた生々しい軌跡だからである．それは，その国の歴史を，現代の社会を，その母語を用いる人々ひとりひとりのいきざまを表すものだからこそ，それを学ぶ私達外国人にとって抱えている限界を乗り越える大きな手段の一つになりうるのだし，特殊技術として一部エリートの独占すべきものではなく一般教育の一つとして，学生の権利として学習されるべきものである．そしてその学習は生半可なものであってはならないのである．